EU 日本学フィールドワーク授業報告要点　　関屋　俊彦

［第 6 回／音楽：さん楽～さる楽／10 月 29 日］

三月に能楽部学生諸君（指導：山本章弘氏）を引き連れ、ベルギーのカトリック・ルーベン大学に関西大学から派遣され、特別授業で使った「私的能楽研究談義」（A4・18 枚）をテキスト替りとして使用した。日本の院生といえども、能楽（能・狂言）の知識には個々の差があり、それは洋の東西に違いはないことから考慮したものである。テキストそのものはインターネットで見られるように許可している。

まずいいたかったのは、能楽はひな祭りの時に「五人囃子の笛・太鼓」と子供の時に歌ったように身近な存在であることを示し、鼓も持参した。また、見市泰男氏に打ってもらった能面の若女と狂言の福の神の面を付けてもらい、実感してもらった。能楽師の中には拒否される頑迷な方もいらっしゃるようだが、その考えが若者を能楽の世界は近寄りがたいと敬遠してきたのではなかろうか。

次に能楽は変わってきたからこそ今日に至るまで古典芸能として生き延びられたことを強調したつもりである。多武峰様式のそれは実馬・実甲冑で演じられた。大鼓の音で馬が驚かないようにするには、どうしたらよいかと近世初期まで心配する伝書も残っている。一日 17 曲演じている記録もある。

能楽の源流、散楽は正倉院御物の弾弓図で有名である。優雅だと思われている能の中にも実は結構激しい動きをする曲があり、演者は身体の柔軟性を求められているということをビデオで見せた。また、06 年の早稲田大学でのシンポジウムで、もっと「楽」すなわち音楽に注目すべきだとの見解は重要であった。音楽は為政者の嗜むものであり、そもそも人格の向上に役立つと『周礼』に示唆されているというのである。また、大秦国すなわちローマ帝国からやって来た散楽の芸人たちの様子が『三国志・魏誌』に記されていることは今後の東西比較文学を研究する上で重要なことであるとも述べた。

事前に EU とのかかわりをもっと知りたいとの要望があったので、海外に紹介されたたとえばドイツ人 F・ペルツィンスキー『日本の仮面　能と狂言』（法政大学出版局）などを参考に供した。